



中杉通りケヤキ並木60年と育成管理への転換

株式会社愛植物設計事務所 趙 賢一・佐藤 力・橋本 恵・丸山英幸・高林則之

中杉通りケヤキ並木は、戦後復興の中で住民らの発議によって昭和29年に植栽された。今日ではトンネル状のケヤキ並木となり、杉並区でも有数の並木景観が形成され、区民に親しまれる場所となっていた。しかし、長い時間をかけて大径木する中で、幹の腐朽による倒木や根上りによる歩行者への障害等の周辺住民の生活や道路交通に多大な支障をきたす恐れが高まってきた。本プロジェクトは、これらの問題状況に適切に対処し、今後も良好な並木景観を保ち続けるために、

地元住民により設立された「中杉通りケヤキ並木連絡会」と連携して、ケヤキの将来的な重新も視野にいれ計画的に管理を実施していく「並木の育成」を提案した。

ケヤキ並木育成管理の検討については、ケヤキ並木が抱える問題状況から育成管理上の課題を抽出し、保護管理方針を策定し保護管理対策を提示した。保護管理対策の内容は、①ケヤキの生育間隔を広げて一本一本の樹木の樹冠を大きく健全に育成、②数年に一回程度の剪定を行い適度な樹高を保つ、③樹木の生育状況

ふるさとのみどり
"ケヤキのトンネル" を50年後も守り育てるために

保護管理の考え方

- ケヤキの生育間隔が狭く、樹木同士が競り合い、弱った木が育ちません。ケヤキを健全に育てていくため、間隔により、1本1本の生育する間隔を設けます。
- ケヤキの多くは樹形のバランスが悪い状態です。地味を整え良好な生育環境をつくり、美しい樹木としていくため、剪定により、樹高を15～18m程度に保っています。
- 定期的に、ケヤキの生育状況を調査し、必要に応じて、保護管理の取組を行います。

保護管理のモデル実施

本格的な保護管理の実施に先立ち、経路沿に実施するモデル地帯を設定しました。

モデル地帯は、中杉通りケヤキ並木の中で、樹齢時期が最も古い(昭和29年)同社ッ谷駅～香梅街道のうち、同社谷路1丁付近(約100m)区間とします。

モデル実施は平成24年1～2月剪定を予定しています。

中杉通りケヤキ並木 News Letter

作品概要

作品名：中杉通りケヤキ並木60年と育成管理への転換
 所在地：東京都杉並区阿佐谷南一丁目から同区阿佐谷北四丁目地内（約3.4ha）
 発注：東京都第三建設事務所
 業務目的：地元住民に親しまれた中杉通りケヤキ並木を50年後も健全な状態で維持していくため、地域の人々と情報を共有し、合意形成を図りながら、育成管理計画を策定するとともに、管理を実施していくことを目的とした。
 業務期間：2009年8月～2014年12月

作品評

この作品は、地元で愛されているケヤキ並木を将来に亘って保全するため、基礎調査から計画策定、実施設計・モニタリング調査まで一貫して担当し、地元との合意形成を図りながら育成管理を実施しているものである。特に、並木の変遷や歴史、生育状況や樹冠投影図、植樹樹形や根上り被害などの丁寧な調査を実施した上で、現在および将来に亘る問題点を明確にし、そのための対策を導いた。こうした成果が提案の説得力を増し、合意形成に役立ったと考えられる。

一方、意識調査による地元意見の収集、ならびに連絡会議の開催やニュースレターの発行などの情報発信などにより地元と意思疎通を図った努力は評価される。その上で、間伐材を活用したベンチやコースターなど、きめ細かい配慮も活きている。

本作品は、同じような問題を抱えている街路樹管理に対するモデル的な役割を果たすものと評価され、最優秀賞となった。

を診断し育成管理計画を見直す、④枯損枝等について監視と管理による安全の確保、とした。地元住民が主体になる育成管理を実施する上で、現地見学会を実施することにより、地域住民と問題状況や将来像の情報を共有し、モデル区間に本事業の案内板を設置し周知に努めた。モデルとなる育成管理実施後は、地域住民を対象にアンケート調査を実施し、本格的な育成管理実施に際しての意見を集約した。また、住民に親しま

れ地域にとってかけがえのないケヤキは、「伐採されても地元と共にあるケヤキであって欲しい。」という住民の強い思いから、発生材の試作品としてマグネットが作成された。今後は、並木沿いのベンチ、町内の案内板等、さらに、余材は、最近都市でも利用者が増えている薪ストーブの薪、ガーデン用チップ材といった活用法も考えられ、間伐・剪定材の利用により、また新たな文化が生まれようとしている。

■ケヤキ並木の問題状況



■ケヤキ並木の経年変化



■市民との関わり



■新たな文化



■業務フロー

